

私は母校である〇〇中学校で教育実習をさせていただきました。私が通っていた当時と同じように生徒は授業中私語がなく、チャイム前に着席もできているメリハリのある雰囲気がありました。

私は中学3年生を担当し、授業範囲は歴史分野の戦後から冷戦の分野をさせていただきました。私が授業する以外の時間は他の先生の授業を見学しました。そのなかで科目に関わらず、先生方がパワーポイントやペア、グループワークなど様々な手立てを用いて「生徒の関心を惹く」ことに重きを置き、一人でも多くの生徒が楽しく学ぶことを目指しておられました。そういった先生方の取り組みは当時では見えていなかった部分であり、1回目の授業実践以降はより先生方の工夫を見つけられるようになりました。先生方の工夫を日々学び取り入れながら授業を行いました。授業では担当の先生がパワーポイントと板書の両方を使って授業をされていたので同じ方式で授業を行いました。授業をしていったなかで教師として大切にしなければならないと強く感じたことがあります。それは「生徒は鏡」であるということです。最初に担当の先生から教えていただいたときはあまり深く受け止めていませんでした。しかし、授業をすると生徒の反応が芳しくなかったり、授業で問いかけても沈黙が続いたりなど起きてしまいました。それは生徒が悪いのではなく、説明の長さ・言葉の選別が不適切であったり、問いかけまで興味を惹けていなかったりなど自分自身に原因があり、そのリアクションを真摯に受け止めていくことが授業改善・教材研究に必要なだと感じました。

生徒の興味を惹くために導入とグループワークを意識して授業を行いました。導入では社会科が得意不得意関係なく授業に興味もってほしいと思い、写真を提示して何が見えているかを問いかけるようにしました。ただ提示するだけでなく、どんな言葉で問いかけるかということ意識することで生徒の関心は高められることを学びました。グループワークでは事象同士の因果関係や相関関係を主体的に学んでほしいという思いと、積極的に取り組んでおられた担当の先生の後押しもあり必ず一度は実践していました。私自身歴史の授業でグループワークをしたことがなかったため試行錯誤の連続でした。題が難しくなり、生徒が何を考えたら良いのか迷ってしまったり、発表しやすい雰囲気を作ることができなかったり、多くの失敗をしました。そのなかで机間指導の重要性を学ぶことができました。グループワークでの指導では最初にどのグループに行くのかというだけでなく、どのようにグループに入って話し合いが活発化させるか、全体の理解度をどこまでもっていくのかまで考える必要がありました。これらのことから教材研究では単元での自分自身の理解度をあげていく作業だけでなく、生徒が学ぶということを念頭において、生徒の立場になって自分の授業を見つめることの大切さを痛感しました。

教育実習を通して、教員のやりがいと苦悩の一端を知ることができました。クラスによって同じ授業をしても反応は全く異なり、授業の都度改善することが必要です。そして生徒がわかったという表情をしたときや一緒に授業を作り上げていく過程はとてもやりがいを感じました。科目・学年の異なる先生方の工夫そしてアドバイスをこれほどまで得られる機会はこの実習以外ではないと思います。そのため日々自分自身の成長を感じられ、充実した時間でした。「生徒は鏡」であり、自分自身と向き合うことがとても多い期間でした。この経験は教職に就く、就かないに依らず、自分の人生に大き

な経験となったと思います。実習で得た多くのことをこれからの人生の糧としていきたいです。